

自然農園だより

宮下洋子 & 周平

大葉も出揃いましたよ

去年より一か月早いスタート

冬でもビニールを外さなくてもいい丈夫なビニールハウスを建てたので、温室を作って、プラグトレーに、

3月20日…ナス、中玉トマト、玉ネギ、大葉

3月15日…しし唐、なんばん、極早生キャベツ

3月20日…ネギの種を播くことが出来ました。

それぞれ順調に育っています。中玉トマトは2枚目の本葉が出て来たので、早くポットに移植してあげなければいけません。

窮余の策も失敗

去年、玉ネギの種まきが間に合わなかったため、雪が融けてから、窮余の策として、直接露地に直播きしてみました。これが大失敗で、発芽したことはしたのですが、雑草も大量に発芽して、単子葉の玉ネギと、単子葉の「すずめのかたびら」や「エノコログサ」、「芝草」や、「スギナ」、などが同時にびっしりと発芽して混在し、ついに草取りを諦めました。



スギナ



芝草

同じ単子葉なので、雑草と貧乏草を見分けることが難しく、機械化も出来ないし、私以外の誰にも出来ないことなので、4列×90mの内、4列×3mくらいやったのですが、ついに諦めました。90m終わるまでやっていたら、それ以外の大事な作業がどんどん遅れてしまうからです。



すずめのかたびら



エノコログサ

待っていて下さったかも知れない方がいたのに

一昨年、自家用と種用の赤玉ネギだけを残して、もう出荷する玉ネギがなくなった時、ある方から大量の赤玉ネギの予約注文を戴きました。もう自家用しか残ってないと、社長を通じてお伝えしたのですが、少しでも分けて戴けないかとの再度のご要望です。

社長の話によると、その方は、重度の化学物質過敏症の方で、いろんな自然栽培の玉ネギを試されたのですが、まほろば農園の赤玉ネギしか食べられないというのです。

それを聞くと、それでもダメとは言えなくなって、もう小さいSサイズの物と種取り用の物しか残っていなかったのですが、出来るだけ大きいのを選んで、種取り用の大きいものも少し混ぜて、差し上げたのでした。

だから去年は、たくさん作って、その方に喜んで戴きたいと思っていたのに果たせませんでした。それで、今年は、玉ネギづくりにには気合が入っているのです。

仁木で初めて作った赤玉ネギ

札幌の小別沢でほんの少し作ったことはありますが、玉ネギはあまり作ったことはありませんでした。仁木に来て、土地がフラットで粘土質なので、玉ネギは、合うのではないかなと思って初めて作ってみました。小別沢も粘土質でしたが、傾斜地なので、乾きやすく、夏場は水が涸れたりするので、あまり乾燥に弱い玉ネギのような野菜は



赤玉ねぎが元気よく

作れなかったのです。水が足りない時は、キュウリやナスに優先的にやらなければいけなかったからです。

植物共生細菌「エンドファイト」

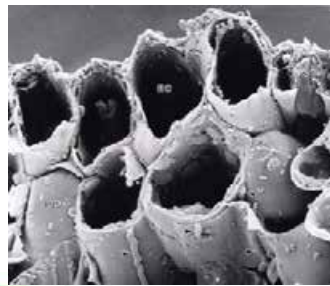
「エンドファイト」とは、植物体内に共生する微生物（植物共生菌）群のことです。これまで、土壌微生物の研究は多くありましたが、植物の体内の微生物についての研究はありませんでした。それが10年くらい前から研究されるようになりました。今では、植物の免疫力を増強し、環境保全型の作物栽培を可能にするかも知れないという微生物として、にわかに注目されるようになってきました。

植物体内に存在するエンドファイトの免疫増強作用のメカニズム解明と、その応用によって、化学農薬を使わない作物の栽培を可能にしようというものです。

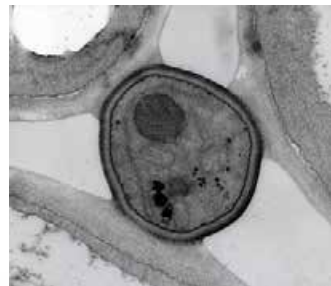
北海道はエンドファイト研究のさきがけで、十勝農業試験場で研究されていました。その後、理化学研究所や各地の公的機関などで研究されていましたが、今では官民連携してイネや小麦などで実用化や商品化も進んでいるようです。

何回か研究発表会に参加していましたが、仁木に来てからは一回も参加出来ていないのですが…。

しかしながら、まほろば自然農園では、浄活水器エリクサーのセラミックに使う、「エリクサー発酵液」が出来て以来（22年前）、科学的に研究される以前から、エンドファイト用として農業に使っていました。



植物組織内のエンドファイト菌糸（矢印）の走査電子顕微鏡写真



植物の細胞間隙に存在するエンドファイト菌糸の切断面（真ん中の丸いもの）の透過電子顕微鏡写真

発芽後2週間くらいで一生が決まる

エンドファイトの研究者の方によると、植物は発芽して2週間くらいまでに植物体内の一生の菌叢（菌の種類とバランス）がほぼ決まるそうなので、（人の腸内細菌と同じですね）一番大切な時期です。だから、苗は買ったり、委託したりすることは出来ません。必ず自社農園で作ります。多大な労働力と、エネルギー、資材、時間、設備、技術が必要なので、苗作りは、まほろば農園の一大イベントです。片時も集中を欠かせません。

エリクサー発酵液に種を浸潤

種は、半日〜日くらいエリクサー発酵液に浸けて、発芽モードになったところでプラグトレイに種まきし、エリクサー水を毎日かけてあげます。育苗用土も主人が0-1テストしながら、作物に合わせて、バランスよく作ってくれます。

【原材料】は

畑の土、モミガラ堆肥、有機対応のピートモス、バーミキュライト、腐植酸、天然ミネラル類、天然カルシウム、エリクサー水、エリクサー発酵液等です。

ところが、近年の科学的な研究は、少しずつ生命の原理から遠ざかっているように見えます。

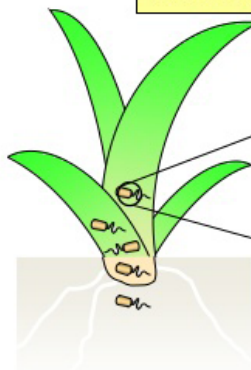
エンドファイトとは？

エンドファイトは、植物に免疫的に病虫害抵抗性を誘導する。

植物が病気や害虫に抵抗性を示す。

世界を先導できる
日本オリジナル技術

化学農薬の低減、収量の安定化、環境保全



Endophyte: endo=within+phyte=plantの合成語

イネ エンドファイト
Azospirillum sp.

効果として
・収量の増加
・免疫機構の活性化

・ゲノム解析が進んでいる
理研と共同でマイクロアレイ
研究を実施中。
・農水省のプロジェクトを通じて
開発を行ってきた。

「農業資材」



独立行政法人 理化学研究所の環境報告書（2012年）によると

エンドファイトには2種類の微生物のタイプがあり、ひとつはカビ（糸状菌）。もうひとつがバクテリア（細菌）です。**カビタイプのエンドファイトは、植物の中で毒素をつくることによって植物を害虫から守ります。**ところが、その植物を、例えば家畜が食べることで消化不良が起こったりするわけです。これは、かなり以前から知られていました。

そして現在、私たちが注目して研究対象にしているのは、もうひとつの、毒素をつくらないバクテリアタイプのエンドファイト（細菌エンドファイト）です。植物の中には様々な細菌エンドファイトがありますが、それが何をしているかは、ほとんどわかっていませんでした。

近年、細菌エンドファイトには、**毒素をつくらずに植物の免疫力を高めたり、生育を促進したり、強光や高温、乾燥等のさまざまな環境ストレスに対する耐性を高めたりする菌がいることがわかり、注目されています。**

化学農薬で微生物を殺す場合、悪い微生物ばかりか良い微生物も殺してしまうので、生態系に影響を及ぼす可能性もあります。そこで、できるだけ農薬を減らし、生態系に配慮した作物栽培が、世界的に求められているのです。

このエンドファイトが誘導する免疫活性化のメカニズムを解明し、微生物資材として利用できれば、農薬や化学肥料を減らし、環境生態系に影響を与えない作物の生産を可能にするというわけです。

近年、細菌エンドファイトには、毒素をつくらずに植物の免疫力を高めたり、生育を促進したり、強光や高温、乾燥等のさまざまな環境ストレスに対する耐性を高めたりする菌がいることがわかり、注目されています。

このエンドファイトが誘導する免疫活性化のメカニズムを解明し、微生物資材として利用できれば、農薬や化学肥料を減らし、環境生態系に影響を与えない作物の生産を可能にするというわけです。

私たち人間は発酵食品などで生きた菌を口から摂取しますが、これは腸内細菌のバランスを改善するだけでなく、私たちの免疫を活性化します。これは、乳幼児の頃から免疫系の発達に重要ですが、大人でもガンの予防などに働いていると言われています。このように人間の免疫を活性化する菌のことを「**プロバイオティクス**」と呼んでいます。

これと同じように、植物の場合は「**植物プロバイオティクス**」という表現を使っています。

エンドファイトと植物プロバイオティクスは同一に使われることも多いのですが、**エンドファイトは植物内微生物の総称。対して植物プロバイオティクスは、エンドファイトの中でも免疫力を活性化する特別な菌です。**

一見、素晴らしい考え方のように思われますが、ここには落とし穴があるように思うのです。

「植物プロバイオティクス」は選抜されたエリート

ここでは、エンドファイトには、カビ（糸状菌）タイプとバクテリア（細菌）タイプの2種類があり、カビタイプのエンドファイトは、植物の中で毒素をつくることによって植物を害虫から守るけれど、動物には有害なので、バクテリアタイプの中の有用菌だけを抽出した、「**植物プロバイオティクス**」を農薬の代わりに使用しようというのです。

カビタイプ（糸状菌）のエンドファイトは、植物の中で毒素を作って植物を害虫から守るのですから、糸状菌こそが植物にとっての免疫の要、と言うか、自ら自滅しない程度に他の菌とバランスをとって環境に適応しようとしているのです。この環境適応能力こそが、免疫力であり、生命力ではないでしょうか。全体こそが生命なのです。

それなのに、科学は、分析に分析を重ね、有用なものを純粋化することによって、生命から遠ざかっていくのです。どんなに原材料が天然であっても、自然であっても、切り刻んでいくことによって、即効性と、機能性は高まりますが、永続可能な自然の生態系からどんどん離れていくのです。



トマトの本葉が出て来ました

糸状菌も大切な菌

それに、糸状菌は、土壌や空気、水中などどこにでも存在しているもので、ヒトなど動物、植物の病原体になる糸状菌もある一方、味噌や醤油、日本酒などの発酵食品や、抗生物質などの医薬品の生産に用いられています。

19世紀に微生物の純粋培養法が確立され、有益な物質の生産に広く糸状菌が利用されるようになりました。抗生物質のペニシリンやセファロスポリンなど、酵素のセルラーゼやプロテアーゼ、ペクチナーゼ、ラクターゼなど、それに有機酸やアルコールなどの生産に糸状菌が用いられています。

しかしながら、更なる生産性向上や特性の改良に、糸状菌の遺伝子組換え技術が広く使われているのは、あまり知られていないようです。特にチーズは、狂牛病が流行ってから、牛の第4胃からとれる凝乳酵素は使われなくなり、遺伝子組み換えでないチーズは、今では希少価値があります。

発酵食品も、発酵に進むか、腐敗に進むか、微妙な分水嶺は、エンドファイトの微生物バランスばかりでなく、水分や塩分や温度・栄養など外的条件（場）との相互作用で決まります。植物では土や肥料、太陽や風、雨や雪等、大自然のすべてが外的条件に入ります。（人では、食べ物や水、空気、太陽、人間関係、社会関係）時々刻々変化する環境に対して、適応能力を持つという事が、

免疫力であり、生命力なのです。

露地野菜は、風で傷ついたり、太陽で日焼けしたり、砂ぼこりや泥はねでよごれていたり、決して見目麗しいわけではなく、廃棄率も高くなり、収穫や処理に多大な時間を要しますが、何物にも代えがたい価値があると思っています。



ルッコラと野草の花



今出荷の三つ葉



キャベツ苗

本店の社長はよく、誰にでも出来ることは、出来るだけ人に任せて、主人や私にしか出来ないことをやって下さいと言われるのですが、私にとって農業は、何物にも代えがたい価値なのです。

ただ単に、安全安心とか、美味しいとか言うだけでなく、美味しい美味しいと思って食べているだけで病気が治り、健康になれるような、そんな野菜を作りたいと思っています。

世界中から集めた700種類以上の天然材料から創られたエリクサー発酵液は、無限に近い微生物群がバランスよく生存している大生命体だと思います。それを浄水器だけでなく、農業にもさらに幅広く生かしていきたいと考えています。そしてそれを自家採種によって、更新し、増幅させていくこと……とても楽しいことに思えます。

植物の免疫力や環境適応能力は成長過程で養われる

植物は、外敵から身を守る為に多くの種類の毒を持っています。ジャガイモの皮や芽の部分、穀物や豆類、野菜の外皮の部分、緑葉野菜の先端部分……しかし、**人類は、植物の成長過程で、毒を作る微生物を取り除くのではなく、植物が本来持っている生存能力を最後まで十分に生かし切ったのです。成長過程で植物の免疫力や環境適応能力は養われるのですから。**

食べる時に毒は取り除く

人類は長い歴史の中で、食べる時に、それらを上手に取り除いて、他の動物より多種類の食べ物を食料にすることが出来ました。それは精製であつたり、発酵であつたり、調味料を使って、熱を加えて調理することであつたり、皮を剥いたり、あく抜きをすることであつたり・・・そして農業や牧畜によって、飢餓から逃れ、脳を発達させ進化してきたのです。

健康な植物のエンドファイト全体を使うべき

エリートだけを選抜する植物プロバイオティクスは、化学農薬より、はるかに良いか

も知れませんが、部分の有益は全体の有益とは限りません。また一時的な有益は永久的に有益とは限りません。有益なものだけを集めれば有益になるとも限りません。

私は、健康な植物の全体を使うべきではないかと思うのです。それが生命そのものだと思うし、免疫力を一番高めてくれるものだと思うし、真に持続可能な農業ではないかと思うのです。



会長のFB & ブログより

「雪が、家に！！！」

3月4日

築78年の家が、危ない！！

雪に押しつぶされそう。

ここ2,3日の雪で、

積み上がるは、屋根から落ちるはで、とうとうガラスの戸を超えました。

家の中は、真っ暗。

雪の圧力で、ガラス戸が今にも、割れそうです。

去年は、本当に一度も除雪した記憶がない奇跡の年。

今年は、毎日除雪しなければならない不遇の年。

管理ハウスは、一晩で潰れました。

隣の葡萄棚も倒壊して葡萄の木も折れた。



あの悪夢が、再び来ないかと、越冬ハウスに辿り着くと、何とハウスと横道の境がない。

「危ない！！」

押し潰されそう。

急遽、除雪機で救援に。

朝方、除雪したばかりが、夜にはこんなに積もって。

何かあの小説「八甲田山」の遭難の気分です。

顔に、容赦なく大粒の雪粒が当たって、皮膚感覚が無くなる。

毎日、温度差

で、雪質が千

変万化する。

温度が高くて、

積雪量が多く、

べた雪。



ハウス横が、2 m以上にもなって、除雪がままならない。

除雪機が進行しないのだ。

未経験の老人にとっては、未知との遭遇で、毎日が、困難と発見の連続である。

困った時には、途方に暮れるが、どういう訳が、助けが入る、実に不思議で、感謝の日々、スリルの中を駆けている。

朝一番、西の空に凄絶な月が山際に傾いた。
新しきマツカムりんごの幼木が、呼応するように、対話している。
何とも、妙。



「人生、チョットちょっと」

3月15日

雨と温暖で、雪は随分と緩み、除雪しやすくなった。

だが、ここに来る、2週間前頃の記事に、こう記している。

この2 mもの大雪の山を凌駕するには、老体には至難の業。

雪山を何回も往復して、漸く下にまで届くのだが、

上の雪面で何度、除雪機が埋まって動かなくなってしまうか。

自分の体も埋まるから、どうしようもない。

キャタピラが空回りして切れそうだ。



緩い穴に傾いて、前のめりになって登坂しない。
古いからシューターが長く、ハウスの鉄線に引っかけて折れる。

とても素人の手に負えない局面だ。

しまいには、泣きそうになる。

どうにもならなくなって、一晩放り投げる。

朝、再開する。すると不思議と動いてくれる。

雪が固まったからか。

気持ちを持ち直して、もう一度。

今までの農作業で、最も困難に思えた。

あの農園の面積から、除雪量は半端でない。

足を入れたら抜かる、そんな危険地帯の山を恐る恐る、あの除雪機の巨体を動かすのだから。不安の連続だ。

しかも、今年初めて動かす除雪機である。

農家はみな慣れて、楽々と易々で行けるのだろうが。

だが、日々、そのコツがつかめてくると、成程と思う。

漸くにして、除雪機が入らないとされたハウスとハウスの間を通り抜けた時は、思わず喝采を叫んだ。

除雪跡が、波を打っているが、そこが遭難の跡でもある。

中古車だから、中々エンジンがかからない、途中で止まる、キャタピラが緩い等々悪条件が重なっているが、それでも全開で雪を飛ばす、これも老体の除雪機に、よくやってくれるね、と車体をナゼナゼする。

機械的でない機械なのだ(笑)。

一方、バックで動かすトラクターのブロワーの除雪機も、中々作動が難

しい。

どうして、こうも思うようにならないのか、と思うばかりに動いてくれない。

そのブレをどうにかしたいものだが、課題である。

よく聞くと、皆も苦労しているという。

「上手くなるまで、3年はかかるよ」、と言われ、再来年に希望を託す。

どうしてこうして、人生の晩年に、自分としては苦手で大っ嫌いな機械類を、何故も扱わねばならぬのか、と思うのだ。

人生の初めに、空だ、無だとばかりに自然農法に傾倒し、人生の終わりにボルトだ、オイルだと目の前の道具にアタフタしている自分を笑う。

しかし、現実を直視し体当たりしてこそ、無の又無、真空という世界が開けるのかもしれないと、フト思った。

人生は短くも長い。

自分としては折り返しとして、気長に歩いて行こうと思う。

若人よ、人生まだまだ。

長い長い。

可能性の距離は測れないくらい長いよ。

ゆっくりでも、チョットちよつとがイイよ。

除雪機で一番学んだこと。

それは、この一寸チョット。

それが、コツかな。

ふかしても、前進は、最も遅く、少し少し、進む。

すると、あの埋まる雪山でも進めた。

人生も同じだよ。

「急がず、焦らず、チョット ちよつと」。

速く行くと、コケるよ！！！！

「ビックリ、一変！！！」 3月30日

「お父さん、お父さん、見て見て、畑の小松菜見える！」

(まさか！！)

今朝まで、雪で覆われていた畑が、そんな馬鹿な？それが、昼下がりの午後2時。

外に出てみて、ビックリ、シャックリ。

一面、雪が解けて、土が見えているではないか。

今朝はまだ白かったのに。

昨夜の雨のせいかな。

今日の太陽のせいかな。

何℃だろう。12℃！



こんな経験も滅多にない。

徐々に、雪解けはあるが、この半日もしない間に、一瞬にして消えるとは、本当に一瞬。

マジックのよう。

こういう春もあるんだな、といたく感心してしまった。

雪があるお陰で、作業ものんびりだったが、急に焦り始めた。
あれもせねば、これもせねば、と。

本当に、今季の雪には泣かされたり、驚かされたり。
自然は、一つとして同じ年はないんですね。
援農事始めは、4月10日（土）からです。
皆さまとまた今年初顔見世でお会いしましょう。

じょうろ 「如雨露がない！！！」 3月31日

只今、苗作り真っ最中で、朝晩の始末や、水遣りに余念がない。
除雪機で、上も下も見えない中で、進むと、露出した太チューブを切ってしまった。
この予見は無理、無理。冬仕舞いで、何で片付けなかったのか。
しかし、無理だなー、太パイプは。去年は除雪しないで雪解けしたから。

井戸水を出して、雪を溶かして、何とか繋げて、やっとこさ灌水チューブの開通。
7mmのレンチがないのには、往生した。
わずか一つの道具が、時に無いために、とんだ時間の無駄をするものである。
普段の整備や段取りが、どんなにか大切なことか。
こんな時、身に染みて思うのだ。

さてもさても、次はシャワーヘッドの話。
さて、苗に水遣りをするのだが、先端の散水ノズルが抜けて、補修するが又抜ける。
それで、余市の馴染みの金物屋さんに修理法を聞いた。
「溶接するも薄くて持たないだろうなー。
取り替えるしかないよ」

実際、農業用にはチャチなので、高い割には持たない。農機具屋にも常備していない。
プラグトレイなので、細かい粒子穴が必要。

同じ年くらいの顔なじみの店主。
「昔は、扱っていたが、今は扱っていないんだ。」
「どうして？」
「使う人が居ないからだよ」
「ええ！どうして使わないの？」
「苗を作る農家が居なくなったからだよ」
再び、
「エエ！！どうしてるの、自分で作らなくなって」
「みな、JA なんか幹旋して、一括仕入れで、専門苗屋から注文で仕入れてるんだ。近くは赤井川、遠くは高知、あの〇〇〇モントからも来てるよ」
「5年もいて、知らなんだ。道理で、皆今時もゆっくりしてるものね」

隣近所、スゴイ棟数のハウスでミニトマトを大量に作っているが、皆苗は委託との事。
(なるほど、そうか。)
「冬場、雪の中、寒い思いをして石油を焚いてやっても採算が合わないから、誰もやらなくなった。
時期になって、苗が入ってきたら、皆一斉に植えて育てる。販売も、一括管理

で、選別から梱包、配送まで、皆決められて任せていて、ただ作るだけだよ。」

「どうして、みんなあんなにきれいに揃って作れるのか、不思議でならなかった。成長も同じテンポで見事に揃うので、さすがプロだな、と感心するばかりだった」

「それはね、組合管理が厳しくて、その規格通りに何でも合わせて作らないとダメなんだ。チェックが入る」

「うちは、自家採種で、種がまちまちだから不揃いも不揃い。

あっち行ったり、こっち住ったり。出来る実



もそれぞれで、でも、年々味が濃くなるかな」
「そんなにこだわる必要がないんだ。ある程度、糖度が出れば、要するに効率よく出荷量が増えればいいのさ」

「そんなもんなんだ。」

「お宅みたいに、そんな農業やっている農家はここには誰も居ないよ。有機やっている農家も、慣行の苗でやってるよ」

「エエ、そうなの？日本では、許されているんだ。それも知らなかった」

「あなたのは、40年前の農家だね。如雨露なんて昔の道具だよ」

改めて、まほろば自然農園の農法自体、何処も余りやっていないことに気付かされたのだ。世の中が進んでいるのか。ここが遅れ過ぎているのか。

如雨露一個で、農業全体の後先が分かるとは。ここにも一物全体が在るのだなと、思わされた。

「種蒔き始まりました」 3月10日

3月6日から種まきがはじまりました。

まずは、茄子と赤玉葱。

これで、ようやく農業が始まったかな、という感じです。

越冬ハウスでの、ホーレン草、小松菜、ルッコラ、レタス系を出荷し終わり、これからは三つ葉が始めます。

キャベツの幼苗が日々、成長しています。

漸次、場所も空き、育苗箱を設置します。

ヤケオ日記の yakeo さんが、土日来て下さって、大助かり。

野菜も店に届けてくれます。

息子・正大からの北のたよりでは、

既にトマト苗の芽が出たという事。

これからしばらく育苗に全精力を傾注します。

すでに、土は、眠りより起き始めています。



こちら側は甘い水農園のトマト苗の様子です。



こちらはまほろば自然農園です。



ヤケオさんの援農日記

オサイ ヤケオ

3月6日

先週までどっかりとしていた倉庫の屋根の雪が綺麗に落ちました。外はまだ寒いのですが、ハウスの中は心地よく、防寒着で作業をしていると汗ばんできます。

今日も会長と二人で苗床作りをしました。

「今朝、ネズミが二匹もかかってね。」と苦笑いをうかべる会長。何年も前の「農園たより」を思い出しました。捕まえた子ネズミを殺すか逃がすか。みんなの議論と顧問の苦渋の決断までの経過が書かれてました。

正誤善悪より生きることの根本までを考えざるをえない問題だと思います。自分は面白いテーマだと思っただけで深く考えるのをさぼってました。

3月14日

NHKのラジオを聞きながら苗の土をほぐす作業をしました。ニュースは、未明に関東各地で隕石が目撃されたこと、名古屋城の金の鯨ホコが16年ぶりに地上に降ろされ展示されることを伝えてました。

この大切な情報を聞き流してしまいました。帰宅しTVで競馬を見てびっくり。メインレースの



金鯨賞、ギベオンという隕石を意味する馬名の馬が、最低人気で一着して、単勝馬券は100円が2万円に、ウイン5馬券は100円が5億円を超える史上最高配当を演出しました。

僕はこの手の偶然の一致が好きなのです。

太平洋戦争末期、連合国が日本壊滅を目標に計画した作戦は「オリンピック」と「コロネット」。なんか嫌な予感。

3月26日

転勤で厚真暮らしもあとわずか。職場の近くにある金曜の昼だけオープンするカフェでの昼飯が楽しみでした。厚別店で仕入れをされているお店です。

オーナーの北條さんが夜も開けてくれ送別してくれました。常連の梅さん、みか嬢、ひろえ嬢と楽しいひと時。

「ヤケオはね、面白がってなんでも首突っ込むけど、あなた自身なんにもないよね。まだまだ全然だよ。」ひろえ嬢からの的確な指摘でした。

自分には何もない。援農だって明確な目的意識



もなく続いているだけだ。10年もやって機械もろくに動かせないのだ。

北條さんはヨガの先生、みか嬢は編み物の先生でたくさんの人に慕われている。ひろえ嬢は最近自家採種のタネの会を催し雑誌の取材も受けていた。

梅さんは厚真の山奥で無農薬栽培をしながら、今は家も自分で建てている。常日頃慣行農法を声高々に非難している梅さんの家造りを、その慣行農法の農家の人達が手伝っている。普通なら村八分でお仕舞いだ。

それだけ魅力的なのだ。

以前、援農の方に、「オサイさんてみんなの輪に入らないんですね。」と言われたことがあります。顧問が僕のことを援農エキスパートのように紹介してくれるのですが、実際の僕は経験年数のわりにたいした知識も技術も身につけていないので、それを気づかれないようにしているのです。



3月27日

会長が肥料を散布するタンク車の運転を教えてくださいました。畑の中でゆっくり馬車を動かしているようで心地よかったです。

今年はこのマホタンクでエキスパートの振りができるかな。

3月28日

去年は3月28日が、僕の援農初日でした。雪はほとんどなく、サクランボの剪定をしたのですが、今年は雪がまだ30センチくらいあります。

今日も苗の土づくり。大きいソリの中で、固くなった土を針金の網に擦り付け濾しながら

ら細かくしていきます。

厚真から車で1時間余りの所にお店から仕入れた商品や野菜が並ぶカフェがあります。地元の牛乳、卵、生クリームで作られたこのプリンが大好きでした。

プリンを盛り付けているママの姿を眺めるのも楽しみのひとつでした。「真珠の耳飾りの少女」にどこことなく似ていてフェルメールの絵が動いているようでした。いつも地味な色の服と三角巾でしたが、フェルメールの素敵なあおいろを感じてしまうのです。

プリンを運んできたママが呟いた。

「実家に帰るの。しばらく北海道には来ないと思う。」

お店もママが考えたプリンも終わりではないけど、きっと何か違うものになってしまいそう。残念です。人生最高のプリンでした。ありがとうございました。

「行き詰ったときは、真逆のことをやってみるといい。」

ふと会長の言葉を思い出した。

そうだ。これを機に、とりあえずプリンを断とう！ 何かが変わるかもしれない。

大きいソリの中にこぼれた土は、なぜかプリンのようになっていました。

